

な存在に於てあつた。所が、之に反して近世數學は、運動を理解するために變數及び函數を中心とする數學であつた。自然は運動し變化する。人間が自然を支配するためには、この變化を支配する法則を知らねばならない。近世數學とは斯うした近世的世界觀の反映ものではなからうか。

この書は斯かる意圖をもつて書かれたものではあるが、其の内容に就ては私の數學知識の缺除のために批判し得ないので、こゝでは唯斯かる書物が出版されたことだけを報告して置くに止めることにする。(貴文館發行、定價二圓五十錢、本文三〇〇頁、索引)(辻本倉雄)

## 彙 報

### 昭和十五年度史學科卒業論文題目

- 國 史 專 攻**
- 近世に於ける古典の復興の思潮  
 中古より中世へ、その通路と開展  
 中世後期の商業に就いて  
 五音 (Pentaton) の構造及意識  
 ——日本音樂史研究序説——  
 平安朝に於ける貴族と音樂

- 朝比奈 博  
 今 中 桂 二  
 遠 藤 祐 正  
 大 築 邦 雄

——主として國文學作品に見たる——  
 近代日本創出過程に残せる福澤諭吉の足跡  
 ——人間の探求——

- 代官制より見たる徳川幕府農民支配組織  
 庶民的世界と中世文化——勸進に就いて——  
 中古貴族生活精神の展進  
 律令制と其の時代  
 陸海軍の創設過程——近代日本成立史の一定礎——  
 法 然 教 致  
 中世の神觀  
 日蓮上人に關する研究  
 元祿期の大阪町人に就いて  
 日本資本主義と封建的なるもの  
 日本近代史概説

- 復古的精神の展開——中世より近世へ——  
 東 洋 史 專 攻  
 朝鮮塔婆建築史  
 金代女真族の漢文化攝取に關する一考察  
 戰國・秦・漢社會の一側面的考察  
 唐代の科擧とその社會的影響  
 唐朝中官領使考

- 西 洋 史 專 攻  
 盛期ルネサンスに於ける個人の一問題

- 正親町公秀  
 岡 本 仁  
 川 村 明 雄  
 工 藤 俊 一  
 兒 玉 重 雄  
 酒 井 忠 雄  
 篠 崎 勝  
 竹 田 聰 湖  
 玉 田 義 美  
 近 田 吉 夫  
 夏 井 本 晃  
 羽 生 敦  
 穂 積 重 正  
 横 田 健 一  
 近 藤 豊  
 田 中 整 治  
 原 八 郎  
 藤 原 利 一 郎  
 六 花 謙 哉

—特に Benvenuto cellini を中心として—  
獨逸 Reformation の歴史的背景とマルチン・

ルツターの信仰に就いて

ジョン・ウエスレーと産業革命

地理專攻

航空輸送の地理學的研究

清時代の支那地圖—概觀並に諸問題—

昭和十五年度史學科講義題目

正科 目

國史

普通 國史概説第一部

國史概説第二部

特殊 日本文化の問題

日本中世の文化

朝鮮古代史の特殊問題

日本近世史料研究

飛鳥時代の文化

室町時代の政治と社會

演習 日本思想史の研究

東洋史

普通 東洋史概説第一部

東洋史概説第二部

會田 雄次

外山 齊

三露 善二郎

川上 喜代四

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

三上 正利

特殊 支那に於ける自治の歴史的研究所

清朝の制度

歐洲に於ける東洋學の發達

明朝の對滿蒙經濟政策

元朝中統以後の通貨政策

清初刑政考

演習 朝鮮古代史の特殊問題

東洋史の諸問題

西洋史

普通 西洋史概説第一部

西洋史概説第二部

特殊 獨佛戰爭に於ける歐洲の狀勢

希臘政治思想史

古代の國家とその思想

L'Ancien Regime の諸問題

エーゲ文明論

演習 第十九世紀に於ける歐洲の政治的狀勢

西洋史の諸問題

史學研究法

普通 史學研究法

地理學

普通 地理學通論第一部

地理學通論第二部

普通 地理學通論第一部

地理學通論第二部

普通 地理學通論第一部

那波 教授

宮崎助 教授

石預 講師

田村 講師

安部 講師

鴛淵 講師

三品 講師

那波 教授

那波 教授

原 教授

時野谷 教授

時野谷 教授

原 教授

井上 講師

前川 講師

村田 講師

時野谷 教授

原 教授

原 教授

原 教授

小牧 教授

野滿 教授

野滿 教授

野滿 教授

野滿 教授

野滿 教授

特殊 最近の探検

地圖學特論

政治地理

東亞の聚落地理

演習 地理學の諸問題

實習 地理學實習

考 古 學

普通 考古學概論

特殊 樂浪の文化

支那考古學(隋唐時代)

エーゲ文明論

飛鳥時代の文化

演習 西亞細亞考古學の諸問題

實習 考古學實習

日本精神史

普通 日本精神史概説

日本精神と外來思想

副 科 目

國 史 日本古文書學特論

國史史料講讀及實習

東洋史 東洋史叢講讀

西洋史 Panke, Über die Epochen der Neueren Geschichte

G. P. Gooch, Studies in Modern History

地理學

獨逸地理書講讀

佛蘭西地理書講讀

考古學 Casson, Progress of Archaeology

教育學教授法 教育學序説

美術史 日本近世繪畫史

佛敎學 六朝以後の支那佛敎

英語 Critical Essays of To-day

Charles Dickens: The Posthumous Papers of the Pickwick Club

獨逸語 大城功新編獨逸文法(第一回)

Wiechert; Hirtanovelle(第二回)

佛蘭西語 田島清編新編佛蘭西語教科書(第一回)

Victor Giraud; La Civilisation française(第二回)

露 語 八杉貞利訂正増補初等露西亞語文法(第一回)

ソウイェトロシヤ初等語學讀本

露字新聞、エリシニコ、ロシア史讀(第二回)

伊 語 伊語初歩

支那語 支那語發音入門、支那語法入門、倉石

中等支那語卷一(第一回)

小牧 教授 2

小野 講師 20

室賀 講師 2

米倉 講師 (20)

小牧 教授 2

小牧 教授 2

梅原 教授 2

梅原 教授 2

水野 講師 2

村田 講師 2

東伏見講師 2

梅原 教授 2

梅原 教授 2

西田 教授 2

高山助教授 2

中村助教 2

藤 助教 2

那波 教授 1

時野谷教授 1

井上 講師 1

小野 講師 (20)

室賀 講師 1

梅原 教授 1

木村助教 2

源 講師 2

塚本 講師 2

中西助教 2

Ashton 講師 2

大山 講師 2

石川 講師 2

伊吹 講師 2

伊吹 講師 2

十時 講師 2

十時 講師 1

黒田 講師 2

倉石 教授 2

支那語讀本卷一(卷二)支那語讀本卷二(第二回)

倉石 教授 2

支那語讀本卷二(第三回)

傳 講 師 2

梵語

梵語文法

足利 講師 4

希臘語

Tanaka, Graecae Grammaticae Rudimenta (第一回)

田中 教授 2

Xenophon, Memorabilia, Homeros, Odyssea, Homeros, Iliad (第二回)

田中 教授 2

Buchholz-Sitzler, Anthologie aus den Lyrikan der Griechen (第三回)

田中 教授 1

羅旬語

Tanaka, Nova Grammatica Latina (第一回)

田中 教授 2

田中久保神田編・ラテン選文集(第二回) Terentius: Phormio Plautus; Trinummus (第三回)

史學記念論叢

田中 教授 1

輝かしき紀元二千六百年の佳歳に際し、又機關誌史林は本年十月刊行號を以つて第百號を數ふるに當り、史學科各研究室に於いてはこの好機を記念するために、史學論叢を編纂することになり中村、宮崎兩助教にその編纂事務を依頼して着々準備にかゝり既に三月初旬各方面に執筆依頼狀を發送した。原稿の切期日は五月末日、出版は大體十月初旬の豫定である。

讀史會

卒業論文發表會 二月十二日(月)午後一時より、及び翌十三日午後六時よりの兩度に亘り陳列館第二教室に於て國史專攻卒業生の中左記諸君の論文要旨發表があり、藤助教、東伏見講師以下學生多數參會し熱心に聴講した。

今中桂二、遠藤祐正、岡本仁、竹田聽洲(以上十二日) 朝日奈博、工藤俊一、酒井忠雄、近田吉夫、横田健一(以上十三日)

卒業生饗會 續いて同月十六日(金)午後六時より鳥羽本店にて卒業生の豫成會を催し、西田教授、藤助教、柴田講師より送別の辭があり卒業生も各自所懐を述べて近來に無いなごやかな夕を過した。

西洋史讀書會

例會 昭和十四年十二月十六日、午後六時より於樂友會館第一號室、第六回例會を開催、原教授、鈴木・井上兩講師を始め十五名出席

一、資本主義と農村

西井 克己君

一、Ernst Troeltsch: Der Historismus und seine Probleme

兼岩 正夫君

例會 昭和十五年一月二十九日 午後六時より於樂友會館第一號室、第七回例會を開催、原教授、鈴木・井上兩講師を始め十八名出席。

一、Romanisme につて

上之 親夫 君

1. G. v. Below: Die Entstehung des modernen

Kapitalismus

辻本 倉雄君

卒業生差別豫餞會 昭和十五年二月二十九日午後二時より於百萬遍鐘屋開催、原教授、鈴木・井上兩講師を始め十二名出席和氣飄々の談笑裡に四時散會。

### 考古學談話會

一月二十六日(金曜)午後六時半より樂友會館にて開催參會者梅原教授以下約二十名。左記諸氏の講演があつた。

#### 一、大和天理の縄文遺蹟

澄田 正 一氏

昨年末奈良縣天理萬女校庭内の縄文遺蹟を發掘調査したが同校庭内に古式土師器住居址のあることは既に報告されてゐる。本遺蹟地は奈良盆地の東縁を南北に走る所謂春日山斷層崖下に布留川上流溪谷により形成された快適な扇狀地である。縄文土器包含層は同家地の西南斜面即ち布留川溪谷の水邊に面して存する。右の包含層の上層には砂礫間層を隔て、土師器包含層が被りてゐる。

遺物の中多量を占めるは有文土器片である。其の器形は大體廣口壺と深鉢の二種類で底部は何れも安定感の強い平底である。全體の土器文様の基調をなすものは太形凹線文であり従つてこの遺蹟は純粹遺蹟である。(イ類)單に數條の太形凹線文の組合せのみより成り而も口縁部の突角乃至は同心凹文に文様が集中する。(ロ類)太形凹線文と同様施文具による刺突文が盛行する一群でこの類に於いては縄文が併用されて來る。(ハ類)太形凹線文と縄文の

併用されるもので縄文に配された凹線文が直線的になり更には屈劃的に使用されて發達した磨消縄文を含む。以上の三類に分類されるこの所謂「天理式」土器が關東の堀ノ内期に併行することは明らかであり關西に於ける類似遺蹟としては大和三輪・富磯、山城北白川、備中津雲・中津等が挙げられる。なほ土器以外では大形石棒小形石錘土錘、斷面矩形の磨製石斧、石鏃等が發見せられた。

#### 二、河内目下貝塚

藤岡謙二郎氏

目下貝塚は生駒山麓に發達した谷口扇狀地の周邊に位置する縄紋系の遺蹟で大正十五年小牧教授、島田貞彦氏等が一部分の發掘を行はれて、其の報告も公になつてゐる。今回大阪府史蹟調査會で其の再調査を試みた處從來の知見にいろ／＼と新しい事實が見出された。いま其の著しいものを數へると、先づ遺蹟の性質が普通の貝塚の概念とはや、異なる事。即ちこゝでは貝殻は遺物包含層中に或る間隔をもつて集塊狀に存するのみで量も少ない。其の二は新たに包含層最下底にほゞ東南に頭部を向けた人骨が五體屈葬の狀態で見出されたことであり、第三は遺物の基調をなすものが末期繩紋土器であるが別に土師器が混在せる點である。本遺蹟は人骨埋葬の點からは備中津雲、三河吉湖の貝塚に相通じ、繩紋土器の型式からは兩者の他、三河保美、紀伊鳴神の兩貝塚、近くは大和宮瀧、同竹之内、同樺原神宮等の遺蹟出土品の一部と相通する。而してそれは畿内に於ける我が石器時代終末期文化の一樣相を物語るものとして興味を興へるのである。

#### 三、定縣安陽開封徐州

文學部講師 水野清 一氏

昨年十月北京から小野勝年君と同行巡歴した各地の遺蹟の大體を擧げる、定縣の開元寺、興國寺、華塔址、石佛寺、衆春園、民衆教育館を見學したが、東魏北齊の遺物が多い。石佛寺も北齊の古寺である。安陽は古物陳列所をみたが、こゝにも北齊の石柱、石碑、墓誌が多い。有名なものでは北齊西門豹祠の碑がある。また殷墟の侯家莊殷王墓をとひ、臨漳縣魏鎮の鄴都址をおとつれたが、こゝでは大倉縣古館にあつたと同じ、龍頭がなほ一個あり、洞清瀾の唐碑などがあつた。開封では睿國寺の瑠璃塔をみ、國相寺の樂塔をみた。前者は五代後者は宋初のものである。河南博物院では新鄭の古銅器はずでに南選してなくなつてゐたが、石刻類は無事であつたので、開元二年四面像と北魏線刻四神石棺をしらべた。それから中華公教會にある猶太教の碑をみ、宋の故宮址龍亭をたづねた。徐州では雲龍山の石佛、そこには盛唐の小佛龕があつた、それから鐵佛寺の北齊佛、圖書館の畫象石、蘇姑藥、黃樓などを大いそぎで見學した。

### 地理學談話會

卒業論文發表會 二月十日(土)午後一時半より地理學實習室にて行ふ。出席者二十一名。

講演者及び題目は

航空輸送の地理學的研究

川上喜代四

清時代の支那地圖——概観並びに諸問題

三上正利

卒業生豫饒會

二月九日(金)午後六時より祇園石段、下鳥岩樓に

て開催、小牧教授他二十二名出席、味の落ちた水だきの鶴を引上げ、狭き室に膝を折つて席を定めたとはいへ、卒業を祝ふ情を盡すに差支へなかつた。紀念撮影を行ふ。會費三圓二十錢

### 東洋史談話會

豫饒會 三月二日(土)午後六時より樂友會館に於て開催、送らる、もの原八郎、近藤豐雨君、送るもの那波、宮崎南先生以下卒業生、在學生二十數名出席、非常な盛會であつた。

### 支那學會

豫饒會 三月五日(火)午後一時より樂友會館に於て開催。

### 西田教授の御進講

去る一月二十三日、宮中御講書始の御儀に際し、西田教授は國書の進講を仰付けられ、「日本書紀神武天皇の御紀」(藤原關都の御條御即位の御條の一節並に御鴻業の御蹟に就いて御進講申上げた。紀元二千六百年の新春に於いてこのことであつたことは、獨り同教授一身の光榮たるのみならず、博く國史を學ぶもの、齊しく感激に堪へざるところとして、國史研究室に於いては二月七日午後六時、門下生一同の名に於いて教授を都ホテルに請じ、その光榮を賀すると共に御儀の御模様就いて聴くところがあつた。

來會するものすべて六十名、京阪神在住の門下生の殆ど全部をつくし、遠きは金澤舞鶴等からも馳せ參じて共にこの紀念の年に

生れ合ひ同じく國史を學ぶ感激を頌ち合つた。

# 會報

## ◇會務擔當ならびに委員の移動

今回評議員會の議により、原、西田、那波、梅原の各評議員は編纂、小牧評議員は庶務會計をそれ／＼擔當せられることになつた。

又先年來委員として會務に盡力せられたる柴田、小澤、小林の諸氏は辭任せられ、新に内田吟風、豊田葵、平山敏治郎の三氏を委員に依頼することになつた。

## ◇會員動靜

### ◇入會

- 京都市上京區新島丸九太町下ル
- 大阪府三島郡千里村
- 中華民國山東省濟南齊魯大學内
- 京都市右京區花園宮上町三九ノ二
- 京都市左京區百萬遍京都アパート内

出雲路敬豐氏  
關西大學圖書館  
Argusine Library

小畑龍雄氏  
(外山軍治氏紹介)  
大築邦雄氏  
(藤岡謙二郎氏紹介)

京都市上京區小山坡倉町三〇日置方

送藤祐正氏  
(稻葉慶信氏紹介)

## ◇轉居

東京市板橋區中新井町三ノ一九六七  
東京市小石川區大塚窪町一

石山乾二氏  
藤井貞文氏

## ◇退會

山本元氏

## ◇死亡

出雲路通次郎氏

## ◇寄贈交換圖書目錄 (三月現在)

日本諸學研究 五・六	著者	日本文化中央聯盟
清原貞雄著中世國民の精神生活	著者	斯道文庫
第二回斯道文庫展覽會に就いて	著者	東方文化學院
東方學報 東京一〇ノ二	著者	北京古學院
古學叢刊 五・六	著者	むかしの會
無 閑 之 三五・三六・三七	著者	中國文學研究會
中國文學 五七・五八・五九	著者	太洋社
歴史と國文學 二二ノ一・二・三	著者	長崎史談會
長崎談叢 二五	著者	善隣協會
蒙 古 十一・十二	著者	史學雜誌
史學雜誌 五〇ノ十一 五一ノ一・二・三	著者	史學會

Bulletin of the Detroit Institute of Arts of the City of  
Detroit. No. 3. Dec. 1939.

- |        |              |           |
|--------|--------------|-----------|
| 歷史地理   | 七四〇六七五〇一・二・三 | 日本歷史地理學會  |
| 社會經濟史學 | 九〇九二〇        | 社會經濟史學會   |
| 史苑     | 十三〇一・二       | 立教大學史學會   |
| 史學研究   | 十一〇二         | 廣島史學研究會   |
| 人類學雜誌  | 五四〇十二 五五〇一二  | 東京人類學會    |
| 考古學雜誌  | 二九〇十二 三〇〇一二  | 考古學會      |
| 文 化    | 六〇十二 七〇一二    | 東北帝大文化會   |
| 國學院雜誌  | 四五〇十二 四六〇一二  | 國學院大學     |
| 史迹と美術  | 十一〇一・二       | 史迹・美術同致會  |
| 社會學徒   | 十四〇二         | 社會學徒社     |
| 和紙研究   | 四            | 和紙研究會     |
| 龍谷史壇   | 二四二五         | 龍谷大學史學研究會 |
| 臺大文學   | 四〇五・六        | 臺北帝大文學會   |
| 國民精神文化 | 六〇一・二        | 國民精神文化研究所 |
| 史 觀    | 二〇           | 早稻田大學文學部  |
| 軍事史研究  | 五〇一          | 軍事史學會     |
| 哲學研究   | 二五〇二         | 京都哲學會     |
| 紀州文化研究 | 三〇十一 四〇一     | 紀州文化研究所   |
- Mitteilungen der Ausland-Hochschule an der Universität  
Berlin. Jahrgang XII. 1. 2.
- Seminar für Orientalische Sprachen.  
Harvard Journal of Asiatic Studies. IV-3&4 V-1  
Harvard-Yenching Institute.